

ボーダレス化を共有する 宗教と商業

国連大学グローバル・セミナー

第8回沖縄セッション(2006/12/17)

三島 禎子 (国立民族学博物館)




ボーダレス化と葛藤

■ ボーダレス現象

- 国民国家(均質性の喪失)
- 文化(価値観の混乱)
- 言語(少数民族言語の消滅)
- 宗教(対立の偏在化)
- 経済市場(国際資本による独占)

■ ボーダーの強化・創生

- 多民族社会
- 多文化主義
- 多言語主義
- 原理主義の強化
- 世界市場の形成



ボーダレス化と融和・・・人はなぜ移動するのか ・・・移民とはどのような人か

■ 従来の移民研究では

- 世界資本主義の論理
→地球上の経済の地域間格差
- 国民国家の論理
→義務権利をもつ国民
→もたない移民

■ 人類学的に考察する

- 移動する人びとの視線
→民族文化・宗教
→移民ではない
「移動する人びと」



ボーダレス化と融和…移動する人びとをめぐって


- 経済活動の歴史的連続性
- 宗教（イスラーム）と商業の相互補完性
- ➡ 移動する人びとの現在と過去に注目
 - 「移民問題」の渦中にあるソニンケ人
 - 西アフリカの経済基盤を作ったソニンケ人
 - 自由に移動するソニンケ人



「ソニンケ問題」…可視化する移民への注目


- ソニンケ民族とは
 - ソニンケ語
 - 階層化した社会
 - ガーナ王国を建国
 - イスラーム化
 - 移動する商業民

- ソニンケの顔
 - フランスへの労働移民
 - フランスにおけるアフリカ系移民の多数派
 - フランス文化・習慣に同化しない特殊な集団
 - フランス国籍をもつ「移民」



「ソニンケ問題」…現代のアフリカ観を象徴

- 人類発祥の地、暗黒大陸、未開の地
- 奴隷貿易や植民地主義の犠牲
 - =モノカルチャー経済、第一次製品の輸出
 - =先進資本主義に従属した経済構造
- 冷戦の犠牲
 - =援助に依存した経済構造
- 固定化されたイメージ
 - =紛争、飢餓、難民、労働移民
- ➡ 文明化され、発展した資本主義世界の観点からのアフリカ観



歴史上のソニンケ人とは

- 統一的な王権
 - 階層化された社会からなる政治体制
 - 活発な商業活動
 - = 外部世界との交渉
 - = 領域内部では流通が発達
 - = 自立した経済圏を形成
- ▶ そこでは商人が活躍していた

商人が動かすアフリカ経済

…古代王国時代における商人の活躍

- 古代王国とは？→西アフリカ最初の王国「ガーナ王国」
- 王国の経済→金と岩塩の遠隔地貿易「サハラ交易」
 - =7,8世紀に本格化
 - =「黄金の国」としてアラブ世界に名高く知られていた
 - =アラブ商人はラクダに乗り、岩塩をはじめ、銅、馬、壺、貝殻、本、鏡、衣料、イチジク、ナツメヤシの実をたずさえ、2ヶ月間かけて灼熱のサハラ砂漠を越えて黄金の国を訪れた。
 - =王国からは、奴隷、蜂蜜、落花生、ダチョウの羽、綿
- ➡ 富＝商品の取引＋商品への課税＋金産地の徹底した管理

商人が動かすアフリカ経済

・・・宗教と経済の相互補完的關係

- アラブ商人＝ムスリム
 - →商業拡大＝改宗者の増加
- ソニンケ商人＝先駆けてイスラームに改宗
 - →ムスリムの自治都市を形成しながら商業を展開
- 長距離交易＝16世紀末頃まで西アフリカの経済的基盤
- 政権の変遷
 - ソニンケの人びとは変わらず交易商人として活躍し続けた
- ➔ 西欧諸国の進出によってアフリカ人商人は衰退した？
- ➔ 1000年にもわたって活躍し続けた商人は、簡単に商売のネットワークや商業を営む習慣や文化を失ってしまうだろうか？



商業の実際・・・①

- ある地方で安く手に入れた産品を、別の地方に運んで利潤を得る
 - 何を見出し、どこへ運び、いくらで売るのが勝負
- 交易沿いの町々に親族を配置し、移動する商人に宿を提供したり、資金を工面したり、商品の保管をしたりなど、旅の便宜を図る
 - 家族だけでなく、民族のネットワークが重要。知らない町へ行っても、ソニンケの人を頼るのが鉄則
- 個人単位か家族単位の商い
 - 個人の立身出世＝イスラームの教えを实践＋経済的に自立して家族や社会のなかで認められる



商業の実際・・・②

- 商品の流通に関して、信用貸しや委託販売による卸売りが慣習化
 - 無担保での貸付
 - 商人に手数料を支払って委託し、売りさばかせる
- 商業活動と宗教活動が有機的に組み合わさっている
 - どちらにも移動という行為がともなう(学ぶ、普及)
 - 自己実現(経済的+宗教的)
 - イスラームのネットワークが商業ネットワークに重なる
- ➡ 今日まで継承されている方法



16世紀末・・・ヨーロッパ諸国との接触

■ 地域間分業体制からなる世界経済の成立

■ 交易品の変化

- 「南」は原料供給地、「北」は消費地
- アフリカからの輸出品
 - 金→農産物(綿花、アブラヤシ、コーヒー)
 - 狩猟採集品(象牙、毛皮)
 - 奴隷

■ 三角貿易

- 工業製品(綿布、金属製品、鉄砲)→アフリカ西海岸
- 奴隷→アメリカ大陸
- 砂糖、綿花、タバコ→ヨーロッパ

★ ヨーロッパは産業革命の絶頂期



アフリカ経済の変化

- ソニンケ商人の役割
 - ヨーロッパ商人や植民地行政との仲介役となって、輸出入の商品の流通にたずさわった

- アフリカ経済はどうなったか？
 - 資本主義世界経済のシステムの周辺に
 - ソニンケ商人は活躍の場を次第に失った
 - 新しい経済機会を求めて、道路や鉄道建設、鉱山開発、農業プランテーションでの契約労働
 - 世界大戦では宗主国の軍隊に従軍
 - 大戦後は、旧宗主国への労働移動(英仏独の例)

- 経済の主体は個人から国家へ
 - 独立後は国家主導型経済
 - アフリカ経済の表層から商人が見えなくなる
 - 経済発展に失敗したアフリカ諸国家の経済に視点が集中≠商人の活動が消滅

- ➡ 見えなくなった商人の活動をどこに見出すか？



今日の 아프리카 経済…アジア・アフリカ間貿易

- 疑問の出発点＝80年代後半のセネガル滞在
 - アフリカの市場には世界各国の製品
 - 誰がどこから運んでくるのか？
- 展開のきっかけ＝セネガルのある村での出会い(ソニンケ)
- **アジアでの発見**
 - 東・東南アジアでは80年代に「日本効果」といわれる経済成長
 - 安い工業製品の生産:衣服、生活雑貨、家電、バイク
 - ソニンケが先駆けて、アジアの動向に敏感に対応した
 - 香港、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア
 - ソニンケ商人による注文:流行の創出、アフリカプリント
- ➡ アフリカ市場向け工業製品の生産が開始



アジアへの移動とビジネス

■ 移動ルート

- 契約労働(西アフリカ・中央アフリカ経由)
- イスラームの勉強(エジプト・サウジアラビア・パキスタン経由)
- 労働移動(フランス経由)
- 故国から直接

■ 「ビジネス」の内容

- 日常生活品の買付け
- アフリカへの輸出
- アフリカ内における販売⇒アフリカプリント

■ アジアの中心

- 香港(70年代～)
- タイ(80年代～)＋インドネシア＋マレーシア＋シンガポール等
- 中国(2000年～)



中国への移動

- 2000年のタイ政府の移民政策転換
 - 不法ビザが摘発→逮捕→国外逮捕
- 香港の返還(97年)
 - アジアの窓口→中国本土
- 中国の経済成長
 - 2000年のGDP年平均成長率は7.9%
 - CFA.F圏のアジアからの輸入が増大
 - 10.4%(92年)→13.5%(02年)
 - 中国の割合=2.2%→5.3%(マリの主要輸入元第5位)
- 2002年には数人が中国へ拠点を移動
 - 香港の卸会社は中国から仕入れ
 - ソニンケ商人らは直接、中国人と交渉
- 2004年頃から中国でのビジネスが本格化
 - 広州=秦漢時代から海外貿易の中樞、唐代には海のシルクロードの起点



ビジネスの実際

- 商人

- 仲介事務所

- アフリカから来る商人に商品サンプルを見せて、現地工場へ注文し仲介料を得る
- 工場へ立替払い

- 運送業社


- 梱包、通関、輸出



アフリカン・プリント

…ヨーロッパ諸国による対アフリカ向け輸出用綿布

- 綿布
 - 重要な交易品・支払手段
 - 綿布の供給を掌握＝交易の成功
 - 西アフリカでは手織りの綿布＋藍染
- アフリカン・プリント
 - 「アフリカの」なものの創出と受容
 - 衣服用の綿布として普及
- 三角貿易の主要産品
 - ジャワ更紗の大量生産化
- 主要輸出国
 - オランダ、イギリス、スイス→産業革命の基幹産業
- アフリカにおける現地生産化
 - 現地工場の国営化→経営不振→工場閉鎖
- アジア資本の参入
 - 工場の買収(インド、中国等)
- アジア諸国による生産と輸出
 - インドネシア、タイ、中国



繊維産業の世界的変遷 とアジア・アフリカの経済関係

- 産業革命:ヨーロッパ
- 20世紀前半:ヨーロッパ⇄日本(機械化・東南アジアへ輸出)
- 1950年代~:日本(先進国市場へ輸出)⇄アジア諸国
 - 1960年代~東南アジアへの企業進出と現地生産化
 - 1970年代~東南アジアから輸出が本格化
- 20世紀末:アジア=アフリカ
 - アジア資本の進出+アフリカ商人の接近
- ➡ ソニンケの経済活動に重なる



ソニンケ商人の役割・・・まとめ

■ 王国時代

- 王国の経済基盤を担う商人として活躍

■ 植民地時代

- アフリカ大陸内での流通


■ 今日

- アジア諸国への注文→流行の創出
- アフリカへの輸出→流通の掌握
- アフリカ市場における卸売りと小売→商品価値の変化



ソニンケと商業

- ソニンケとは？
 - 誇り、正直、働き者
- イスラーム
 - 実践→ソニンケらしさの追求⇒商業で成功
- 旅立ち
 - 知識や知恵を得ること(イスラーム)
 - 富を得ること(商業)
- ジャティギ
 - 遠来の客をもてなす人→移動先における世話人、保証人(経済的・社会的)
 - ジャティギになる誇り
 - 商人のネットワーク=客としてもてなし、同じような利益を得るよう計らう



おわりに

- **中国**に滞在する**マリ人**の100万長者**D.ジャワラ**は、以前から故国での事業に出資したい旨を表明していたが、ようやくその計画が具体的な段階に入ったようだ。
- 先週の土曜日、同氏は「商業と工業のためのベマグループを立ち上げた。発足式には投資・中小企業促進省の大臣ウスマン・チャムが臨席した。
- ベマグループの成立は、**マリ・中国間の貿易**における新しい活力を生み出そうという同氏の意欲によるものである。同社はマリの経済人にとって中国への入り口になるだろう。
- 現地でバイクやコンピュータ、あるいはタイルなどの中国製品を購入しようとする業者は、多くのチャンスを得るだろう。
- また同氏は両国の**経済界の仲介役**となり、必要な人には十分な情報を提供することを明言した。



何を読み取るか・・・

- 中国＝2000年になってからソニンケ商人にとっての経済の中心地
 - 広州＝秦漢時代から海外貿易の中枢として栄えた街
 - 唐代には海のシルクロードの起点
 - 広東華僑は世界的ネットワークのなかで大資本
 - いつの時代も世界的な経済都市
- マリ＝ソニンケ民族が多い
- ジャワラ＝ソニンケの名前
- ジャワラ氏は1990年代にはタイ(80-90年代の経済の中心)
- 経済界の仲介役
 - 移動する商人に宿を提供、資金を工面、商品を保管、旅の便宜を図る
- バイクやコンピュータなどの商品＝21世紀の商業の対象



現象を普遍的にとらえる

- 商人の伝統を継承するソニンケ
 - 古代王国→グローバル化時代
 - さまざまなアフリカ商人グループの一例
- 商業の価値
 - 生産か流通か？
- イスラームと商業のネットワークの連続性
 - イスラームを起因とする「文明の衝突論」からの脱構築
 - 商業の間共同体的な性格＋宗教の普遍主義
 - ⇒共存志向的性格の商業ネットワーク
- アフリカ経済再考